

[別紙 2]

審 査 の 結 果 の 要 旨

氏名 小山 智典

本研究は、正常知能を有する広汎性発達障害（PDD）児の認知能力検査と自閉症状評定尺度のプロフィールを、以下の二側面より検討したものである。まず、臨床場面における鑑別に混乱が生じている注意欠陥／多動性障害（ADHD）児のプロフィールと比較し、両者の鑑別診断に有用な手がかりを得ることを試みた。また、臨床的差異がこれまで十分に検討されていない PDD の下位診断、すなわち自閉性障害（自閉症）、アスペルガー障害、および特定不能の PDD（PDDNOS）の 3 群で、そのプロフィールが区別されるかどうかを比較検討した。

本研究では、正常知能を有する PDD 児 100 名（自閉症 20 名、アスペルガー障害 23 名、PDDNOS 23 名）と ADHD 児 53 名を対象に、Wechsler 式児童用知能検査第 3 版（WISC-III）と、子どもの自閉症状を評価する小児自閉症評定尺度東京版（CARS-TV）を施行した結果に基づき、下記の結果を得ている。

1. 正常知能を有する PDD 児は、3 群いずれについても、WISC-III において、「理解」が低くて「積木模様」が高い、特異な認知プロフィールを示した。この特徴は ADHD 児のそれとは明確に異なり、両者の鑑別診断に有用な手がかりとなる。
2. 正常知能を有する PDD 児は、CARS-TV において、対人的相互反応やコミュニケーションなど多数の項目で、ADHD 児と比して有意に多く自閉的な症状を示した。

3. ADHD 児の約 3 人に 1 人は、自閉症状のひとつである“こだわり”を示した。正常知能を有する児で、その子が PDD であるか ADHD であるかを鑑別しようとする際には、両者に共通した特徴であるこだわりを過大に評価するべきではない。
4. 認知能力検査と自閉症状評定尺度において、正常知能を有する PDD の 3 群の間でほとんど差がなかったことから、本研究のように学齢に達した正常知能を有する PDD 児の下位診断の区別は、発達歴に関する親からの詳細な情報なしには、かなり困難であることが示唆された。

以上、本論文は正常知能を有する PDD 児の臨床的特徴を明らかにした。もとより対象者が少ない当該研究分野において、先行研究と比して十分な例数を確保して比較検討したことは、学術的に価値が高い。また、診察治療場面における鑑別に混乱が生じている ADHD 児との差異を明らかにした臨床的意義は大きく、学位の授与に値するものと考えられる。